



長いロープを張って

著者	鈴木 智里
雑誌名	教育を考える一言
巻	2
ページ	4-4
発行年	2012-06
URL	http://hdl.handle.net/2241/00123802

長いロープを張って

1. 教育を考える一言

「援助が必要な子どもとの間には長いロープを張っておいて。こちらが無理に引っ張ることではない、子どもがちょっと引っ張ったら近づく。これを積極的な受け身と言うんだ。」

2. 背景

これは昨年5月の教育実習で、教育相談担当の先生がおっしゃった言葉です。教育相談は「すべての教員がすべての児童生徒に」とのことで、一次的援助から三次的援助を詳しく説明して下さった際に発していたのです。子どもとの距離感をロープにたとえ、「長いロープを張って、相手の状況がすぐ伝わるようにしておく必要がある。ただ、こちらから無理にぐいぐい引っ張ることはないのだ」ということでした。しかし、相手の状況がすぐ伝わるように、ある程度ロープを張っておく必要があります。ロープがたるんでいたら相手の状況はすぐには伝わってきません。この時、「積極的な受け身」という距離のとり方の難しさを痛感しました。

3. 考察

ここでは「教育を考える」ということでしたが、この一言は教育というよりカウンセリングかもしれません。しかし、このような捉え方、距離感のはかり方は学校で常に子どもとかかわる教員にも必要なのではないかと考えます。

当時、教育臨床学のゼミに所属し、中学校の相談室に相談員ボランティアとして行っていた私は、この考え方に感銘を受けたとともに、その距離感をとることが課題となりました。

過去を振り返ってみると、私が高校1年の冬、仲の良かった友人が学校を休みがちになり、いつしか不登校になってしまいました。私はその友人に対して、どう接していいかわからず、とりあえずメールをしたり、授業のノートやプリントを渡すために外で会ったりしていました。当時の担任は、家庭訪問に行っても親御さんにしか会えず、本人は2階の部屋から出てこなかったようです。そこで学校とのパイプになろうと思ったのです。しかし、メールや電話で「みんな待ってるよ！」なんて言ったところで、ただのプレッシャーにしかならず、どんな内容を送ったらいいか悩みました。日が経つにつれて、朝から「学校なんか嫌いだし辞めたい。人が怖い。自分が死んでも誰も困らない」というメールが来るようになっていました。当時の私はそんな友人をただ待つことが不安でならなかったのです。私はとにかくロープを引っ張り続け、今にも引きちぎれそうだったのかもしれません。これは私のエゴであったようにも考えられます。

また、このロープはすべての児童生徒、そして特に特別なニーズのある子どもたちすべてに必要なものでしょう。なんでもすべて自分から介入していくのではなく、相手の出方を見たり、待つことも立派な教育であると考えます。そして子どもの主体性を養いつつ、援助していけると理想的だと感じます。

参考文献

氏原寛『実践から知る学校カウンセリング[教師カウンセラーのために]』培風館、2000年
田上不二夫『実践スクールカウンセリング 学級担任ができる不登校児童・生徒への援助』金子書房、1999年